大阪大学出版会の〈夢〉

夢はバラ色

鷲　田　清　一*

Mission of Osaka University Press

Key Words：Publication, Self-learning, Cooperation between university and society,

この４月，大阪大学出版会では，新しい叢書《阪大リーブル》を創刊する．『ピアノはいつピアノになったか？』『日本文学 二重の顔』『超高齢化社会は高齢者が支える』という，魅力的なタイトルをもった３冊が，同時に書店の棚に並ぶ．その各巻の表紙の裏に，わたしが書いた次のような「創刊のことば」を添えていただいた．

フランス語の「本」（livre）と「自由」（libre）を重ねたところ，そこに「阪大リーブル」の精神は込められています．そこからv/bを外すと「読む」（lire）ということばになります．読書は，未知の他者との対話です．この対話は，寝ころんでも，ひなたぼっこをしながらでもできます．しかも，自分にほんとうに必要な速度で．読んでいるうち，わたしたちの思考と感受性は，ときに微かに，ときに劇的に変化します．生きるうえでのこれまでのこだわりがほぐされ，もっと広々とした場所に出て世界を見ることができるようになります．そう，「本は人を自由にする」のです．

ひとが自由になるその可能性を社会に提供すること，そこに出版という事業の社会的な意義がある．本をつうじて視野を広げること，未知の視点を手に入れること，そして他人のさまざまな生き方，考え方と対話することでおのれをいったん相対化すること，そんな経験にたった千円か二千円の本が誘ってくれる．

●

さて，大学の社会貢献ということが言われて久しい．大学の社会貢献を言うとき，これまで力を入れて取り組まれてきたのは，産学連携である．そう，企業との研究開発における連携である．が，社会は企業だけで成り立つものではない．大学の社会貢献は，一般の市民を宛先とするものでもなければならない．大阪大学は法人化以後，とくに市民の活動との連携に力を入れるようになった．大学の社会連携は「産学連携」と「社学連携」の両輪で進むものでなければならないという考えからである．

大学の「社学連携」でこれまでもっとも大きな規模でなされてきたのが，医療である．大学の附属病院は，医学部・歯学部における研究・教育という業務のほかに，市民を対象とした診療にも深く携わってきた．近くに大きな大学病院があるというのは，市民にとっても大きな安心である．

大学はしかし，医療以外のところでももっと社会貢献する必要がある．先日，新聞を読んでいて，本学コミュニケーションデザイン・センター教授の平田オリザ氏（劇作家・演出家）のたいへんに重要な指摘にふれた．平田氏は，大学に体育館やスタジアムなど，身体を鍛える施設はかならずあるのに，表現とかコミュニケーションといった心の能力を鍛える施設がないのはおかしいではないかというのである．次世代の人材を育成するためには，身体の鍛錬も必要だが，それ以上に心の鍛錬が必要である．「学歴」などという証明書一つでなんとか定年まで生き延びられる時代は，過去のもの，それも一時期の日本社会だけのものである．これからの世代に求

*Kiyokazu WASHIDA
1949年9月生
1977年京都大学大学院文学研究科博士課程修了，関西大学教授，大阪大学教授を経て，現在，大阪大学出版会会長，大阪大学理事・副学長，
哲学・倫理学専攻，近年は哲学的思考を社会の現場へとつなぐ《臨床哲学》の試みに取り組む，サントリー学芸賞，桑原武夫学芸賞，紫綬褒章

められるのは,「肩書」ではなく，社会がどんなカタストロフィックな状況に直面しても，それでもしぶとく生き抜く力，紆余曲折をくぐり抜ける力である．大学が育成する人材は「ガラスの人形」であってはならない.

そういう心を鍛える事業，それが学生・市民を対象とした教育である．そしてそれを横から支えるのが，自習の場であり文献情報のアーカイヴである図書館であり，感受性の襞を拡げる美術館やコンサートホール，劇場であり，さらには対話をつうじた合意形成の能力を鍛えるさまざまのコミュニケーション・ワークショップをおこなうための「道場」のような空間である.

こうした大学の教育・文化事業にもう一つつけ加えるべきは，出版事業である．言うまでもないことだが, 大学というのは, 社会の外にあるのではなく, 社会の内にある．たしかに，大学は社会内の外部とでもいうべき位置を与えられてきた．同時代の社会に奉仕するだけでなく，同時代の社会のあり方を批判し，人類の視点から，あるべき社会の姿，未来社会の姿を構想するという，特別な位置をあてがわれてきた．しかしそれは特権なのではない．たえずそうした社会外的視点というものを社会へと送り返していかなければならない．大学出版会というのは，そうしたミッションをもっている.

大阪大学出版会は，1991年の大阪大学創立60周年記念事業の一環として，1993年4月に，アサヒビール株式会社からの寄附を基金として創設された．そして大阪大学の多彩な研究成果を広く社会に公開・還元するための出版事業を開始したが，それ以降は，市民の「啓蒙」というよりも，市民の「セルフ ラーニング」を支援するための教育事業という方向性をよりはっきりと打ちだすようになった．2001年には大阪大学創立70周年記念出版事業として「大阪大学新世紀セミナー」全31巻を刊行し，さらに2003年からはシリーズ「大阪大学新世紀レクチャー」の刊行も始めた．そしてこのたび，その第３弾として（冒頭にもふれた）教養書シリーズ「阪大リーブル」の継続的な出版を始める.

大学の出版会がまずは取り組まねばならないのは，専門的な読者を対象とするので一般の出版社では採算もあってなかなか出版が難しい学術書や学術資料を，大学やその後援会の支援を受けつつ刊行することである．言ってみれば文献としての「文化遺産」の保存である．そのような使命をもつ大阪大学出版会がいまなぜ教養書の出版にも精力的な取り組みを始めようとするのか.

●

理由はすこぶる明確である．大阪大学がその「精神的な源流」として位置づけている江戸期の懐徳堂と適塾という民間の学問所の伝統を現代に活かそうというのである．懐徳堂と適塾は,「官学」の機関としてではなく，町衆がみずからの「セルフ ラーニング」のためにみずから資金を出しあって創った学問所である．なぜそのような学問所を民間で創る必要があったのか.「天下の台所」たる大坂に集結していた全国の各藩の役人や文化人に混じって「商売」をしようとすれば，まずは文化的素養が欠かせない．それだけではない．江戸を介してではなく大坂の地から直接，世界に直結しようとするなら，まずは当時の先端的知識の集約された漢学や蘭学を学ぶ必要があった．その背景には，徳を積んでみずからを高めるという熱い志，この地から日本を建て直してゆこうという高い志があった．日本の近代化,明治維新の文化的な震源地は，ここ大坂にあった．その精神を21世紀においてあらためて担おうとしているのが,「社学連携」を大学の使命として打ちだす現在の大阪大学の姿勢であり，それをサイドから厚く支援しようとしていま活動を一気に拡げようとしているのが大阪大学出版会である.

〈国家〉への忠誠をミッションとするものでなければ,〈学問〉への超絶的な忠誠をミッションとするものでもない．大阪大学は，学問をつうじて〈市民社会〉への貢献を，さらには社会からほんとうに信頼される人材の養成をミッションとしている．そのミッションを下支えするものとして，大阪大学出版会の事業はある.

「地域に生き，世界に伸びる」．大阪大学のこのスローガンに共振しつつ，大阪大学出版会は今後の事業を展開してゆく.